



ふくしま発「恩送り」で いのち輝く世界に変えたい！

チームふくしま代表として、復興・恩送り活動に取り組む
半田真仁さん（福島）。総合商社マン、福島移住、大震災、
お互いさまの街づくり、その思いと歩みとは。

仲間と共に、ふくしま発「幸せを呼ぶ いのちのメッセージ」を世界に届けます！

いのちが一番大事！

一九七七年、広島市に生れた。父は、思いやりのある人になってほしいと「真仁」と命名した。「平和教育を受けて、市の合唱隊員として平和記念日には歌っていました」

小中学生のとき、認知症の祖母を母が自宅で世話をしていた。「死にたい」という祖母に、「私がいるから」といい、仏壇に手を合わせる母の姿を覚えています」

大学生では、著名経営者の話を聴きたいと勉強会等にも参加した。「父は県庁に勤めて、『故郷を良くする。広島を変えれば日本が良くなる』が口癖。日本で初めてコンピュータを県庁に導入しました。そんなチャレンジ精神が受け継がれていたようです」

卒業を前に、「今の自分は、社会人として基礎もない、まずは社会勉強だ」と就職活動をした。当時は、就職氷河期だった。「面接は全滅。相当尖った学生でしたので、使いづらいと思われるのでしよう。東証一部の総合商社に合格。その年、変人枠採用がありました。」

景子が天国に旅立った後、私と淳子は献血をしました。「景子ちゃん、行ってくるからね」と、仏壇に話しかけながら。

困った時はお互いさまー。支えられる人も、支える人も幸せになれる。そんな「いのちのバトンタッチ」を大切に祈ります。

つて滑り込みです（笑）
ガス・燃料部門には配属され、物流手配や人事などを担当した。「最初の上司から『地元の本、関心のない本を買って読め。商人は人間力、その地をよく知れ』と指導されて、毎月、何十冊もの本を読み続けました」

仕事を重ねる中で、ふと違和感を覚えるようになった。
ある取引先のガソリンスタンドの経営者が、借金を抱えて自殺した。「保険金で債権を回収できる」との同僚の声を聞いた。会社目標は、利益と株価を上げることが最優先された。

「本音と建前ばかり。人としての心をなくしているのでは？と感じていました」

仕事上の事故で大病院に長期入院した。小児病棟に入院するある子と仲良くなった。
「その子が『大人になりたい』というのです。その気持ちがよく分かりませんでした」

突然、その子は病棟からいなくなった。看護師は「転院です」とだけ言った。それは、亡くなったとの意味だと後で知った。

困ったときは、お互いさま

「輸血を確保できないので、治療を延期するかもしれません」

十二月のある日、景子の主治医が言いました。

私は、何のことも全く意味が分かりません。強力な抗がん剤治療では、造血機能が低下して輸血をしないと生命の危険さがあります。年末年始、日赤での献血がお休みになるために輸血が不足していたのです。

景子のいのちは、会ったこともない、名前も知らない多くの人に支えられていることに初めて気づきました。

年末の治療は、私が献血者を個人的に確保することで、予定通り続けることになりました。

そのためには、予め病院で血液検査をして、輸血可能者を十名程度確保することが必要になったのです。しかも、全てを一週間程度で準備しなければいけません。

職場の仲間にも、お願いするしかありませんでした。

上司に相談すると、「仲間じゃないか」。そう言っって職場の全員に事情を話してくれました。直ぐに十人を超える人が自主的に申し出てくれます。

みんな、仕事を終えた後、片道一時間半以上かけて検

鈴木 中人

查のために病院へ来てくれます。自宅に戻るの深夜です。その姿に胸が熱くなりました。

お正月、緊急輸血が必要になり、若い部下が駆けつけてくれます。帰省せずに寮に残ってくれていました。

「困った時はお互いさまです。僕にできることは何でも言ってください」

輸血が終わって帰る時、笑顔で言ってくれました。

私は、部下に対してはとても厳しい上司でした。部下の前で涙を見せたことは一度もありません。でも、そのときは、鬼の目にも涙が流れ落ちました。

そして、「この恩返しをしなければ」と心の底から思いました。

景子が天国に旅立った後、私と淳子は献血をしました。

「景子ちゃん、行ってくるからね」と、仏壇に話しかけながら。

困った時はお互いさまー。

支えられる人も、支える人も幸せになれる。

そんな「いのちのバトンタッチ」を大切に祈ります。

「声も出ません…。いのちの現実を前に涙がこぼれました」
リハビリ期間も活用して、夜間の専門学校に通い精神保健福祉士の資格を取得した。

「人事関係の仕事を通じて、うつ病の社員も多くなりました」

「いのちが一番大事！一人一人が輝いて、いのちを大切に考える仕事がしたい！と心底思うようになりました」

感謝溢れる街「ふくしま」に

復職後、仙台支店にて人事総務業務を担当した。行政などの依頼により、キャリア支援などの講師も務めるようになった。

二〇〇七年、福島県庁職員に転職した。県の目玉事業として、日本初「二ト支援と就労支援」をワンストップで担う相談事業窓口の統括を担当した。

「その専門職の公募条件は、精神保健福祉等の資格・キャリアカウンセラー・経営や人事経験有りでした。県庁の方よりお声をもらい応募。人のための仕事をするという意欲で福島に移住。給料は数分の

一になりました（笑）」

自ら飛びこんで、昼も夜も休日も、地元の福祉関係者や若手経営者などと交流した。しかし、突然、知事が逮捕された。目玉事業も廃止、職場は配置換えとなった。

二〇〇八年、独立して「採用と教育研究所」を起業した。

「自分でやる一企業の社会貢献活動を活用して、新卒採用や社員研修を行う会社です。福島の仲間が本当に助けてくれました」

同年、福島の仲間とNPO法人「チームふくしま」を設立、理事長となった。地元活性化イベントや児童養護施設の支援などにも取り組んだ。

二〇一一年、東日本大震災が発生した。福島は、地震・津波・放射線に襲われた。福島市内には、被災者と避難者が溢れた。

チームの副理事長・吉成洋拍さんが言った。「寒さに震える千二百の方に豚汁をふるまおう」。豚汁を食べたおばあさんは「豚汁と家交換だな。何もかもなくなったが、兄ちゃんに会えてよかった」と言っ、涙を流して抱き合った。

「福島は『世界一同情に溢れた街』

いやる心が育ったと思います」

恩送りが世界を変える

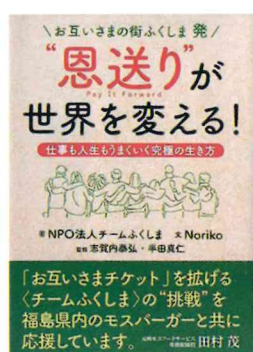
二〇一九年、「お互いさまの街ふくしま」活動をスタートさせた。

「困ったときはお互いさま」で助け合う街づくりである。

「辛い悲しい思いをしている子どもたちに何かをしてあげたい。毎日どこかの子ども食堂で食べられるようにしたい。本気で考えたのが『お互いさまチケット』です」

これは、お店にきた人が、次に来る誰かの分を先に支払うことで、チケットをもらった人が無料・低価格で利用できる。ひとり一人の思いやりで、みんなが助け合って生きやすくなる仕組みである。

「みんなの食糧庫」も始めた。事業所や自宅にある食料や日用品を提供し、ひとり親世帯や困窮世帯



新刊本「恩送りが世界を変える」

に利用してもらったものだ。

「お腹が満たされたら前向きに生きられます。仲間と熱く語り、まずはやってみよう実践。その思いに共感する人がじわじわと増えてくれました」

そんな中、二〇二二年、活動の中核を担った吉成さんが、突然倒れて天国に旅立った。

「大衝撃。自分は何かしていない、ただ申し訳なくて…」

「ハグ（吉成）さんの生き様から受け取ったものがある。『生かしていただいているこのいのちを、全力で自分の役割に使おう』『自分にできることで、人を幸せにして自分も幸せになろう』。そう仲間全員で誓いました」

「お互いさま」活動を、ふくしま発「恩送り」活動として全国に輪を広げるべく行動した。

「恩送り」とは、今あることに恩を感じ感謝して、次の誰かが喜ぶ顔を想像して見返りを求めないで送る、愛ある優しい行動です。

「恩送り」は、優しくする人も、優しくされる人も、どちらも笑顔になれる関係です。それを叶えてくれるのが「お互いさまチケット」

になってしまった。だからこそ今度は福島を『世界一感謝に溢れた街』にしたい。支援活動を続けよう。みんなで心に誓いました」

福島は、原発事故により、農水産品は売れない、観光客も来ない、仕事もない状況に陥った。

その中で、「福島ひまわり里親プロジェクト」をスタートさせた。

全国の学校などで育てた「ひまわりの種」を福島に送る→福島福祉作業所で種を袋詰め→種を購入してもらい全国で育てる→また福島に送る。ひまわりは放射能を吸収するらしいとの話もあり、福島県内にも無料配布する。循環型の復興支援の輪を支え合つ心と人の絆を広げようとするものだ。

「当時、私は放射能測定器の買い付けに全国を奔走していました。最初は『福島ひまわり、無理です』と言いました。県外から戻ると、チーム仲間全員が『ひまわりプロジェクトやります。半田さんが代表、よろしくね』でした」

ひまわりの種は、献血のプレゼン、福祉作業所で搾油後ひまわりカレー、バスのバイオ燃料にも一部活用されるなど、復興支援のシ

です」

そのチケット導入店は、モスバーガー、和菓子店、整体院、子ども食堂、パン屋、カフェ、農家ピザ店など、宮城・山形・能登半島被災地など全国・世界にも拡大。

チケット導入研修（ホスピタリティの意味・仕組みづくり等）も展開。「恩送りが世界を変える」（チームふくしま著・ごま書房新社）も出版し、その輪を広げている。

目を潤ませて語ってくれた。「福島は、大震災で助けてもらいました。だからこそ、ふくしま発で『恩送り』を世界に広げたいのです。その主役は、参加してくれるひとり一人です。子どもたちがその活動によって、大人になって『恩送り』のサポーターになってくれたら幸せです。天国の仲間たちの思いを胸に続けていきます」

いのち輝く世界に

七月、福島に何うと、満面の笑顔で迎えてくれた。いのち、生きる幸せとは何かを聞いた。

「いのちは、リレーのようにつないでいくもの。まずは身近な人を



福島ひまわり里親プロジェクト

ンボル活動として世界に知られるようになった。

突然、国は「ひまわりは放射能を吸収しない」と発表した。「なんだよそれ…」と批判・問い合わせが殺到した。

「頭がグワングワン、目の前が真っ暗です。全てのお声に向き合い、プロジェクトは支え合つ心と絆を育むものですと伝え続けました」

その志は支援者の手で、絶えることなく大きく育っていった。二〇二五年、参加者累計六十五万人、参加教育機関は六千校以上、震災発生日には全国の仲間が集う「ひまわり甲子園」も開催している。

「震災で一番怖いのは、忘れ去られてしまうこと。ひまわりを通じて、福島と全国の人との交流が生まれ、自分の心に、遠くの人を思

大事にと思います」

「生きる幸せですか…。生きていくだけで幸せです。前の時代を思えばもっと大変だった。足るを知るでしようか」

家族についても聞いた。「妻も子どもも、僕を変った人と思っているかも？席を外しますので直接聞いてみてください」と、急遽、奥様インタビューに。

「ひまわりプロジェクトで主人と出会いました。やっていることにずっと共感・尊敬しています。私にも子どもにも、一人の人間として接して理解してくれます。主人と結婚出来て幸せです（大笑顔）」奥様を前に、優しく凛とした眼差しで語ってくれた。

「お互いさま・恩送りの根っこにあるのは、ひとり一人の『いのち輝く世界』です。福島発、みんなで世界を変えたんです」



お互いさまの街ふくしま
講演会動画

半田真仁（はんだしんじ）。福島県在住。チームふくしま理事長、採用と教育研究所所長。福島ひまわり里親プロジェクト、お互いさまの街ふくしまの活動を世界に発信。